（公益財団法人）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

第４回　幼児教育実践学会

口頭発表

「幼児の健康な心と身体を育む」

～一輪車がある環境が子どもに与える発達への影響～

学校法人　大浦学園
門司こばと幼稚園

発表者　甲斐　裕美

「幼児の健康な心と体を育む」

◎研究内容

一輪車がある環境が子どもに与える発達への影響

◎テーマ設定の理由

主体的に体を動かし、日々の遊びの中から子ども達が楽しみながら、運動能力の向上や心の成長をはかっていくことで育っていく力について考えていきたい。子ども達の発達は、様々な側面から考察することができるが、本園では一輪車を導入しており、その取り組みからみられる幼児の心身の発達は非常に興味深いものであるため、今回は一輪車を研究教材として取り上げ、その取り組みを中心とした発達について研究してみたい。

◎テーマへの取り組みのてがかりと方法

・一人ひとりの園児を研究の対象とし、一輪車に興味を持ち始めた時点からの過程を記録し、身体的・精神的な面から考察する。
・保護者から見た子供の発達や成長の様子をアンケートする。
・一輪車の取り組みの中でのエピソードから心身の発達について考察する。

幼稚園の概要

【教育方針】

心身の健全なる発達を図り、明朗で気迫に富み、情操豊かな子どもを育成し、又個性を尊重する保育を行う。

【園の概況】

福岡県北九州市門司区の西端に位置し、園児の通園範囲を基本的には JR 門司駅を中心とした大里地区のみとしている。園内は木々に囲まれ、沢山の自然と触れ合える園庭や 3500 冊の優良絵本を蔵書した[えほんの家]、泥んこ遊び専用スペースの[どろんこひろば]、菜園がある。

【クラス編成】

年長組		年中		年少		満３歳児	
つき	25	さくら	26	はと	21	ひよこ	13
ほし	23	うめ	28	ひばり	20		
ひかり	22	もも	26	つばめ	17		
	70		80		58		13

合計　221 名

【教職員構成】

園長	副園長	主任	教諭	補助教諭	職員	合計
1	1	1	11	3	4	21

一輪車の取り組みの概要

平成５年より導入、本園においての一輪車教育はカリキュラムとして特に設定しておらず、基本的には保育者が取組みを促すことはせず、クラス単位で練習する事はない。園児個人の自発性に委ねている為、自由時間等を利用して個々で練習している。

最初は、単に一輪車に跨ることから始め、乗ることに慣れてくると、廊下の壁や窓をつたいながら練習していく。途中にある、教室やトイレの入り口等、壁のない所を渡っていくことで、徐々に手を離しての走行が可能となる。転ばずに一階の廊下（32m）を完走できる様になると園庭に練習場所を移動する。

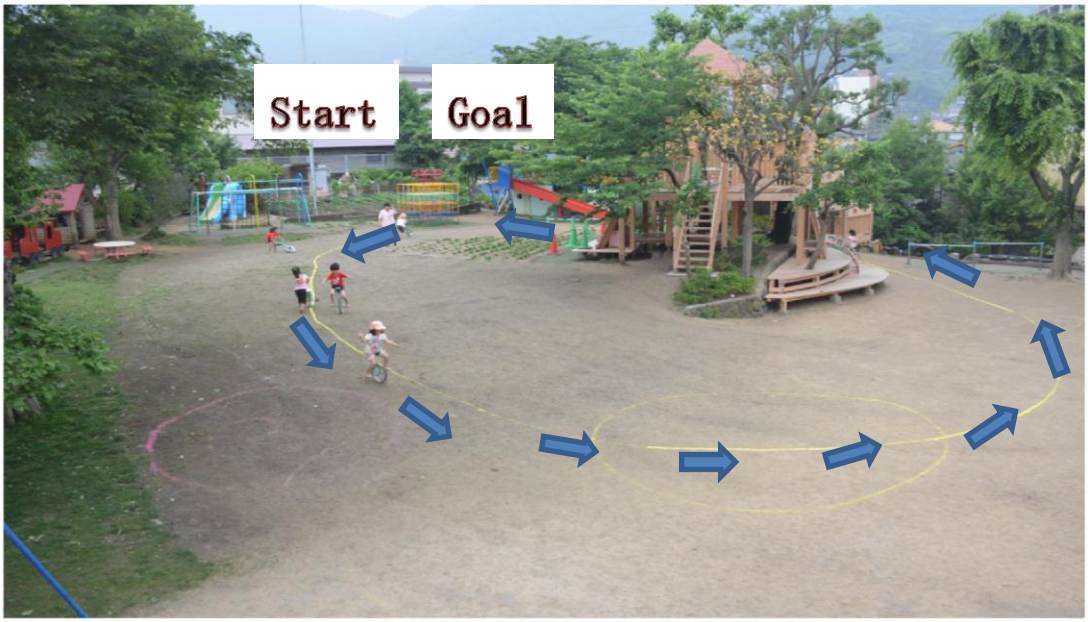
屋外練習ではジャングルジムを発着点とし起伏のある園庭を一度も転ばずに一周できることを目標とする。転ばずに一周回れるようになり、園児が出場を望んだ時点で一輪車の成果を発表できる場である**一輪車コンテスト**に出場する事ができる。

一輪車コンテストは平日の午前１０時より開催される。コンテストは出場児の保護者の方を招待し、全園児が応援する中で行われる。１０分程度の時間内に転ばずに園庭を一周できれば合格となる。時間内に合格できない園児は後日、再コンテストとなる。

合格した園児は全園児の輪の中で教職員によって胴上げを行う。これをもって一輪車の「合格」としている。

※年長児は運動会（１０月）の表現演技の中で校庭を一周し、披露する。

園庭周回距離・・・約 72m　最大高低差・・・・・・85 cm



一輪車を導入したねらい

一輪車を導入することにより、遊びの中から運動能力、集中力、バランス力等を育むとともに、生きていくうえで重要な自己防衛能力を高める事ができる。同時に、他者と共に取り組むことでコミュニケーションをはかり、語彙の獲得や豊かな感性の育ちも見られるようになる。自身の力で意欲的に目標に向かって進むことによりその過程の中で自身の努力、日々の進歩を実感することができ、その積み重ねが自信へと繋がっていく。また、目標の達成を味わう事で自己肯定力が高まり、一人ひとりが持つ力が引き出される。以上の様に、一輪車を導入することにより、心身ともに大きな成長がみられると考える。その一輪車に取り組む子ども達を援助するうえで重要な事は褒めて見守る事である。まずは園児が自ら一輪車に興味を持ち、「乗ってみる」ところから始める。

取り組み始めても基本的には褒めてあげるだけで細かいアドバイスはせず、主体的な意欲や友達との関わりによって、子ども自身が自分達で発見し獲得していく。

※本園では一輪車を導入する以前からはだし教育（年中・屋内外問わず）を行っていた為、足の裏でバランスをとったり、力を加減する事が出来る等、一輪車に乗る為の要件に適しており、スムーズに導入できる環境があった。

一輪車コンテストを行う意義・目的

・コンテストを行うことにより、子ども達にとっての明確な目標ができ、それに向かって意欲的に取り組むことができる。

・出場する子供たちを全園児が応援し見守ることで、憧れや競争心等から、自分も一輪車に乗ってみたいと思う興味、関心を持つきっかけになっている。

・園庭の高低差（上り下り）やカーブを曲がりながら走行する等の難関に挑戦し成功する事で、達成感を味わう事ができる。

・家族や全園児に見守られ、応援してもらっている事で、目標の達成の喜びをより強く感じる事ができる。沢山褒めてもらう事、自身の努力（その子そのもの）を認めてもらう事で、自尊心や自己肯定力を育んでいくことに繋げたい。そしてこの経験からまた新たな目標を自分自身で見つけ、意欲的に取り組む姿が見られるようになる。

・２５０人以上の人に応援され、祝福されることは多くの園児にとって初めての事である。注目されるなかで主役としてやり遂げる経験は、その子にとって大きな自信になる。

一輪車の取り組み　記録動画

年中男子の個人記録

身長	99cm	性格	明るい	運動能力	平均的
体重	15kg	行動	友達についていくタイプ 意志はしっかり持っている		
一輪車に乗る動機					
同じクラスで仲良しのT君が意欲的に一輪車に乗り始め、上達していく姿が刺激になり、始める					

	幼児の姿
1日目	一輪車に乗り始める→跨るだけ（やる気は続かない）
10日目	トイレの間に挑戦できずに回避する
15日目	上手く進めずに渋滞をつくる　気が向いたときにしか乗らない
冬休み	
40日目	トイレの間に挑戦　失敗
42日目	階段の間に挑戦　失敗　　何度転んでも練習を重ねる
48日目	トイレの間に挑戦　成功
50日目	トイレの間をスムーズに渡れる様になってきた
53日目	階段の間に挑戦　成功　　積極性が見られ始めた
55日目	止まらずに進めるようになってきた　　やる気が見られる
60日目	移動スピードが向上してきた　　楽しくなってきた様子
62日目	廊下の横断に挑戦　失敗
65日目	廊下の横断に挑戦　成功
66日目	廊下の横断を担任以外にも披露する
70日目	手を離しながら進めるようになる
80日目	廊下の縦断に挑戦　フラフラしながら進む
85日目	廊下の縦断に挑戦　　安定してきた
93日目	廊下の縦断に成功　園庭へ練習場所を移す
103日目	園庭の1周に成功　コンテスト出場へ
109日目	一輪車コンテスト出場　　合格

A　クラスの入口　（80㎝）

B　トイレの入口　（1.2m）

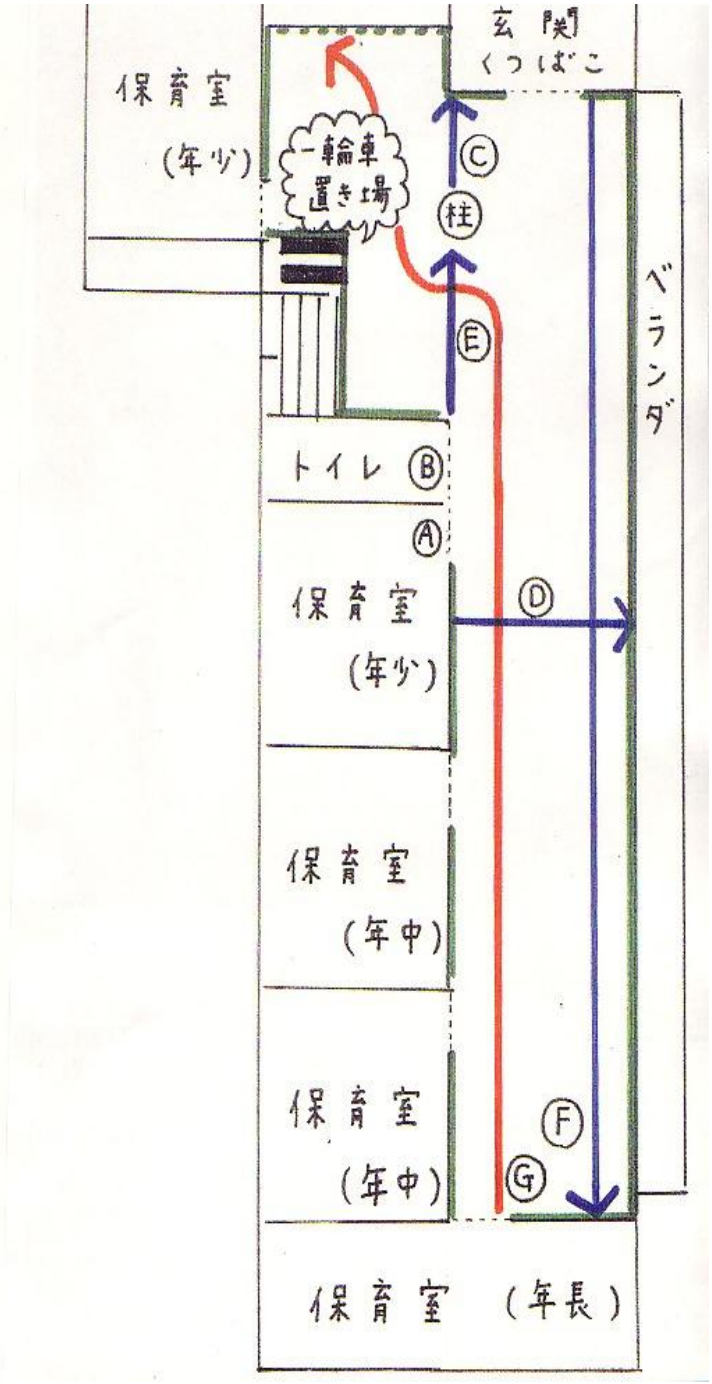
C　壁から柱　（1.4m）

D　廊下横断　（2.3m）

E　トイレから柱　（3.2m）

F　廊下縦断　（28m）

G　廊下縦断+カーブ（31m）



◎1Fの入口に置いてある一輪車

一輪車50台
（誰でも自由に使える）

◎床・壁面はマット状になっている。転んでもぶつかっても衝撃が少ない

ゴムマット
32m

取り組み事例から見る発達

事例Ⅰ

【憧れのお姉ちゃん】

対象児
H ちゃん・・・年中児
自己主張が強く、保育者をはじめ、他人の話をなかなか聞けない。世話好きな性格で、下の学年の子には慕われている。他人の事ばかりが気になり、自分のことが疎かになる事がある。明朗活発ではあるが、落ち着きがなく状況判断ができない事が多々ある。
F ちゃん・・・年長児
真面目で、面倒見が良い。集中力はあるが、慎重で心配症なところがある。表現力が豊かで、絵画、制作が得意である。
観察者
保育者・・・H ちゃんの担任（９年目）

H ちゃんは、自己主張が強く、他人の話に耳を傾けるのが苦手な為、保育者が頭を悩ませることがよくあり、その度に、H ちゃんに合った対応をしてきた。自己主張の強い H ちゃんは、周りからなかなか受け入れてもらえず、友だちと馴染めずにいた。

H ちゃんより一つ年上で年中組から入園した F ちゃんは、内気な性格で、クラスでうまく友達を作ることができずに、少し寂しい思いをしていた。

二人は近所に住んでおり、通園バスでは隣同士に座ることが多々あり、面倒見の良い F ちゃんは H ちゃんのお世話をすることで、自分の居場所ができ、安心して通園できるようになった。一方、H ちゃんは自分の話を聞いてくれて、優しく接してくれる F ちゃんに次第に懐くようになり、二人は仲を深めていった。性格の異なる二人が、互いの足りない所を埋めあい、支えあっているように感じた。

F ちゃんは、年中児の２学期から一輪車に熱心に取り組み始め、その姿を見ていた H ちゃんも見よう見まねで隣で一輪車に跨るようになってきた。（その時期に他の年少児は一輪車には特に興味のない時期）。H ちゃんの動機は単純に F ちゃんの傍にいて、真似をしたいだけだったのだろう。しかし、F ちゃんに比べ体も小さく、集中力も途切れやすく、すぐに成果が出ないこともあって、乗ったり、乗らなかったり、気分次第であった。取り組んでいる時は窓枠につかまり、そばを通るいろいろな保育者を呼び止めて「見て見て」と自慢

げに披露した、保育者も「H ちゃんすごい！」と褒めると、嬉しそうに「私、F ちゃんみたいに乗りたいの！」と答える。その取り組みを見守る保育者は二人の微笑ましい姿をとても嬉しく感じていた。F ちゃんと一輪車をしている時の H ちゃんは普段よりもさらに嬉々としていた。

やがて、F ちゃんは持ち前の運動能力もあって、飛躍的に技術が向上し、廊下をスイスイ走れる様になり、取り組みの場所を園庭へと移していった。H ちゃんが少し寂しくなるかと思っていたが、本人は F ちゃんが上手になっていく姿を嬉しく思っているようで、憧れの眼差しで見ていた。

園庭でも上手に乗れる様になった F ちゃんはついに晴れの舞台である《一輪車コンテスト》に出場することが決まった。その事を知った H ちゃんは、まるで自分のことのように、周りの保育者や友達に言って回っていた。当日の朝もバスに乗るなり「今日は F ちゃんの一輪車コンテストなのー」と大きな声で叫んでいた。とても楽しみにしている様であった。

《一輪車コンテスト》は 250 人を超える園児や保護者の前で披露する発表会である。子どもにとっては恐らく人生で初めての大舞台である為、緊張してしまう子も多い、F ちゃんも普段とは少し違う緊張した面持ちでその時を迎えていた。その様子を見ていた H ちゃんはいつもよりもさらに大きな声で「F ちゃんがんばってー」と励ました。少し離れた場所にいた F ちゃんもその声が聞こえたのか、少し笑顔を見せた。そして、ついに、《一輪車コンテスト》が始まった。毎回、誰が出ても大きな声で応援している H ちゃんだが、今日は、自分の一番の友達で大きな憧れの存在である F ちゃんのチャレンジということで、その応援の声は園内の誰よりも大きく、響き渡っていた。その声援に後押しされて F ちゃんは一生懸命、そして、確実にこぎ進めていったが最初のチャレンジでは転倒してしまう、しかし、すぐに立ち上がり、再チャレンジへと向かう。その間、H ちゃんは声が枯れてしまうほど叫び続けた。ついに、F ちゃんが一周走り切り、大きな歓声の中、担任の胸にゴールした。その時、園内で一番大喜びしている H ちゃんの瞳には大粒の涙が輝いていた。「F ちゃんすごいね、すごいね」と涙を流しながら何度も言い、胴上げでは最高の笑顔で、心から F ちゃんを祝福した。保育者が「F ちゃん頑張ったね、かっこいいね」と声を掛けると、「私、F ちゃんみたいに沢山練習する！一輪車に乗れる様になる！」と熱い思いを吐露した。H ちゃんが胴上げで宙に舞う日も近いかもしれない。

【考察】

その自由奔放な性格から、なかなか周りの友達に受け入れてもらいにくい H ちゃんを初めて無条件で受け入れてくれた F ちゃんに H ちゃんは絶対の信頼を置いている。姉妹かと思うほど仲の良い二人、特に H ちゃんからの想いは強い。《一輪車コンテスト》では保護者の方が涙を流す姿は多くみられるが、園児、さらに異年齢の子どもが友達の合格に感動して涙を流す場面はなかなか無い。共に一輪車に取り組んだ事、そして、何よりも心のよりどころである F ちゃんの合格であるからこそ、共感し、感情移入するあまり、涙が出たのだろう。二人の関係の中には、信頼・尊敬・思いやり・受容等様々な思いが存在する。
H ちゃんにとって F ちゃんとの出会いは非常に大きく、その憧れから今後の自分自身の目標が明確なものになった。一輪車の取り組みは二人の関係を更に発展させたのだろう。

事例Ⅱ

【自分でできるよ！！】～自信から生まれる積極性～

対象児
M 君・・・年長児
体つきが小さく行動面に幼なさが見られる。進んで運動をすることも少なく、園庭の遊具の高所には登れない時もある。自分の想いを相手に伝えたり、自分から友達の輪に入って行くことが難しい。何かがあるとすぐに泣く、何事に対しても受け身である為、常に人の助けを待っている。
観察者
保育者・・M 君のクラス担任（12 年目）

4 月、M 君は年長組に進級。入園より 2 年間、保育者が見ている限り、一輪車に乗ったり、触れたりすることはなかったと思われる。これまで、一輪車に対して全くの無関心である M 君も興味を持ち、自ら進んで取り組んで行く姿が見られるようになるのか・・見てみたい！！

そんな M 君が進級してしばらく経過したある日、M 君自ら一輪車に取り組み始めた。「年長組になったんだから」と両親や兄から急かされでもしたのだろうか・・？私には正直きっかけが分からなかった。M 君に尋ねてみると「皆みたいに一輪車に乗れる様になりたい」と言う。「やる気があってすごいな。かっこいいね」と声を掛けると照れくさそうに笑った。4 月の時点では M 君の身長（98 ㎝）では、小さなサイズの一輪車でもペダルに足が届かなかった為、カナヅチでサドルを叩いて限界まで低くした。「M 君の一輪車ってわかるように名前シールを貼っておこうか！？」と提案すると「それいいねぇ！」と喜んでくれた。廊下の壁や窓枠を伝って一輪車をこいでゆく。はじめは腕の力に頼り一輪車が思う様に操れなかった。それでも M 君は毎日、朝から取り組む。何度も何度も。「今日は早く起きたよ」「今ぐるっと廊下一周まわったよ！」等、M 君の方から私に向かって一言ずつ言葉を発しながら一輪車に乗るようになった。M 君が少し変わった！！

壁伝いに一輪車をこぎ進める事 1 ヵ月、片手をついてスムーズに進めるようになっていき、新たに 1～2mの幅を手を放してこいでいこうとする姿が見られた。スタートを切るまでタイミングを計り、ペダルを前後させている。M君の緊張が伝わり、私も手をあわせて祈るように見守っていた。M君にとってはものすごく勇気のいる事、最大限の力を出しての挑戦だったと思う。5 分くらい待っただろうか、その時が来た、M君が壁から手を放した！！・・・がっ「わぁ！！（すごい）」という私の声と同時にM君は転倒してしまった。

M君は大きな声を上げて泣き「もういいっ」と言って、その日は一輪車には乗らなかった。（これでしばらくは一輪車には取り組まないだろうなと思った。）

強く応援される事がプレッシャーにならないようにと言葉を選び「痛かったね」と声を掛け、M君の気持ちに寄り添う。M君は何を思っていたのだろうか。

翌日、M君はいつもより早く、徒歩で園に来た「よーしっ、今日も頑張るぞー」と一輪車を手に取り、笑顔で廊下へ向かった。驚いた・・昨日は失敗したけど、嫌になった訳ではなかった。いや・・失敗ではなかったのだろう、自分もできるようになると信じている。M君の中では日々、上達していると感じているようだ。だから、毎日取り組めているのではないだろうか。怖がりで慎重なところもあるが、M君自身が一つ一つ目標を決めて、それを達成していくことで自信も得て技術も向上して行けたように思えた。私はただただそばでその様子を見守り、わずかな進歩も見逃さない様に心掛け、喜びを共有したり、具体的に褒める事にも努めた。

練習を始めて２ヶ月と少し､M君は１Ｆの廊下を手離しで走れる様になった！！汗びっしょりになって、目標であるクラスのドアを真剣に見つめながら、息を切らして必死にペダルをこいだ。小さいＭ君がとても大きく見えた「やったね、ここまでこれたね！！」と手を握って喜びを共感する。それから自信を持って、園庭での一輪車コンテストの練習を始めることになる。「外に行っても大丈夫やろ」と友達に言われたことも嬉しかったようだ。坂道やでこぼこ道（芝生）を走るのは難しく、何度も何度も転んだ。でもＭ君は決して諦めなかった。泣くことも少なくなっていった。Ｍ 君には「夏休みになる前にコンテストに合格したい」という、強い思いがあった。外に出て２週間、園庭を 1 周した。応援し、見守っていた友達も担任もＭ君に駆け寄って喜びをわかちあい抱き合った。

1 学期の終業式の日、コンテストを開催することになり、Ｍ 君の母親も応援に駆け付けた。Ｍ 君は第一子（兄）から間があいての誕生で、生まれつき体も小さかった為、同学年の子についていけないのではと母親はＭ君を常に心配し、Ｍ君の行動に対して先回りをして手を貸してしまう事も多かったそうだ。

一輪車コンテストが始まり不安そうな表情でＭ君を見つめる母親、Ｍ君も緊張の中、最大の挑戦へと足をすすめる。クラスの友達や他のクラスの園児たちの大きな声援に後押しされてＭ君は園庭を見事一周することができた。Ｍ君も安堵から少し笑顔を見せた。その姿にＭ君の母親も涙を流した。我が子が一輪車に乗れることを想像出来なかったという。母親も不安だったのだろう。「息子の大きな成長を見ることができた」と言ってくださった。

大きな目標を達成したＭ君、その後、様々な活動に意欲的に取り組む様になり、「自分で

やってみる」「自分でできる」と言う様になった。また、自分から保育者や友達に話しかけたり、活動中も手を挙げて自分の意見を発表したりできる等、表情もとても明るくなった。

【考察】
・自分の思いを相手に伝えるのが苦手で、自分から友達の輪にも入ろうとしなかったＭ君だったが、友達に励まされたり、先生に思いを伝えるようになったことから、自己主張、コミュニケーション能力の向上が感じられる。 ・Ｍ 君が転んで投げ出した時に保育者は必要以上に言葉を掛けすぎず、本人の自主性を尊重しながら、Ｍ君に合った言葉掛けをし、気持ちに共感したことでＭ君の情緒は安定し、自分の気持ちを切り替えられるようになったのではないだろうか。 ・Ｍ 君は自分で努力し、一輪車に乗れる様になったことで、大きな自信を得たように思われる。自分ってすごいんだと思えることで、どんなことに対しても、きっとできる、大丈夫と感じながら取り組みを進めていくことが出来るのではないだろうか。自信や自尊心は形となって見えるものではないが、自身を支える、生きる源になって欲しいと思う。

事例Ⅲ

【仲良しのＮ君とＨ君】

対象児
Ｎ君・・・年長児
言動や行動に幼さが見られる。活動に対しては、始めは意欲的であるが、集中力に欠け、苦手だと思ったことはすぐに諦めてしまう。運動は苦手である。負けん気が強い。
Ｈ君・・・年長児
体つきは小さい。普段はサッカーをしたり、活発に体を動かす事を好む。活動に対しては、意欲はあるが、集中力が続かない。注目されたいという思いが強く、目立ちたがりでふざけるところがある。
観察者
保育者・・・Ｎ君とＨ君の担任（３年目）

Ｈ君は友だちとの関わりはあるが、競い合うという部分で他者に関心がなく、反対にＮ君は友達の発言に対し、自分のものさしで物事をはかり、友だちを越えようとライバル視するところがあった。二人でいる時は集中力に欠け、一人がふざけると、一方も一緒になり、ふざけることもあった。一輪車の取り組みの中でも、それぞれが他のことが気になり、集中できず、成果が見られなかった。Ｈ君は年中の一学期から取り組んでいたのだが、年長の５月になっても進歩はなかった。私は幼稚園以外でも遊んだり、関わりのある二人が同時期に取り組んでいるので、お互いに刺激し合い、共に乗れるようになって欲しいと考え、声を掛けつつ、傍らで見守り、二人の気持ちや態度、様子がどのように変化していくのだろうと考えた。壁を伝いながら、「僕もうここまでこれたし」とＮ君。取り組み当初はその言葉を気にすることなく自分のペースで乗るＨ君。一緒に取り組んでいるうちに、Ｈ君も少しずつＮ君がどのくらい乗れるようになったか気になり始めたのだろう。朝の身支度を済ませ一番に一輪車に取り組むＮ君。Ｈ君がバスで遅れてくると、「僕、昨日より上手になったしね」と一言。今までは、Ｎ君の発言や行動を気にすることはあまりなかったのだが、「あっ」と声を上げ、いつも以上に早く身支度を済ませ、真剣なまなざしで一輪車へ向かったＨ君。それからは、「もうここまで来たし」というＮ君の後ろを「タッチしよう」と追いかけたり、「僕もここまできたよ、さっき乗り始めたばかりやけど」と少し対抗するような発言や態度がＨ君に見られ始めた。周りの友達が乗れるようになっていく中で、少

し焦りのような、周りの友達に憧れを抱くような、そんな姿が二人に見られだしたある日、勇気を出して手を離す事ができたN君。本当に嬉しそうで、「今ね、手を離したよ」と笑顔で教えてくれた。私は、N 君が今まで以上に意欲を持ち、取り組み始めたように思えたため、「さっきは勇気を出したね、すごかったよ、びっくりした！」「次も絶対乗れるよ」と声を掛けると、キラキラした輝く瞳で「うん！」と答えてくれた。そんなN君の姿を見てH君は「早く乗れるようになりたいな・・」と小さくつぶやいた。「どのくらい乗れるようになった？」と私が聞くと、「ここが渡れる！」と1m幅のところだったが、誇らしげに答えるH君。「さっきできたけ見とって！」と自信に満ち溢れた表情と声。少し離れた場所から「僕もさっき行けたし！」とH君のことが気になる様子のN君。少しずつ乗れるようになると「マット２枚行けたけ、次は３枚」と自分たちで目標を定め、挑戦していく姿が見られるようになっていった。「ここまで来たー」と叫ぶN君のあとに挑戦し、悔しがったり、「僕こんなところまで！」とH君も一輪車に取り組む中でN君をライバル視し始めたようにも思えた。その時、「H君すごい！マット何枚行けたかね」とN君。「N君、もうすぐ向こうまで行けそうやね」「二人で行ってみる？」とH君。ライバル心からお互いが認め合い、共に頑張ろうとする姿もみられ始めた。集中力の続かない二人だったが、楽しみつつ、対抗心を持って長時間取り組むことができ、一緒にコンテストに出場し、合格していった。

合格後の二人の表情は輝きに満ち溢れていた。絵本の時間や話を聞くとき等、周りの友達に話しかけることも無くなり、様々な活動に対して、長時間取り組めるようになったりと、集中力が増した様に感じた。N君は苦手だと諦めてしまうところがあったが、その後、ピアニカが弾けなくても諦めず、何度も弾けるまで練習する姿が見られた。

【考察】
個人から集団への第一歩となる他者への関心を持つこと、他者の良いとこを認める事で、子ども達の世界は大きく広がり、新たな発見をすることに繋がっていくと思われる。そのような相手と切磋琢磨した関係を築いていく中で、悦び、挫折、向上など、様々な感情を共有することで、会話も膨らみ、コミュニケーションをとりながら、たくさんの語彙を獲得していくことに繋がっていくように感じられた。 同じ目標を持った友達と出会い、お互いに頑張る姿に刺激されたり、保育者や他の友達から応援を受けたことで、一輪車に取り組む姿も変わっていったのではないだろうか。自分が成し遂げた事に自信を持ち、取り組みの中であきらめない気持ちを育んだことにより、後の活動に対する意欲、集中力も高まっていったように見受けられた。

事例Ⅳ

【お母さん見てー見てー】

対象児
Kちゃん・・・年中児
何事もそつなくこなすが、へそを曲げると激しく落ち込み、部屋の隅に隠れたり、なかなか元に戻ることができない。気が強く、負けん気も人一倍強い。その反面、恥ずかしがり屋で、大勢の前では自己発揮できない。
観察者
保育者・・・Kちゃんの担任（３年目）

Kちゃんは2人の小学生の兄がいて、もうすぐ妹が生まれるという環境で情緒が非常に不安定であった。年少の３学期頃から気に入らないことがあると、すぐにかんしゃくを起こしたり、集団遊びに参加せず、一人でポツンとして、保育者を困惑させることが多くあった。

年少の３学期の終わり頃から同じクラスの女の子の影響で一輪車に興味を持ち、毎日、取り組むようになった。一輪車に没頭する姿は、寂しい気持ちを紛らわしているように思えた。保育者は毎日、自ら一輪車に乗るKちゃんを見守り、励ましながら応援を続けた。同時期に一輪車に取り組み始めた他の友達の中でも一番最初に壁から手を放せるようになり、周囲の友達からも「すごーい」と尊敬された。そのことが更なる動機となり、増々、やる気を出して一輪車に取り組んだ。「先生あぶなーい、そこどいてー」（‘こっちみてー’‘そこまでいくよー’という、Kちゃんなりの表現）という表情には、以前のような、どこか悲しげで、不安な顔は無かった。廊下を通る、これまで関わりの薄かった保育者にも自分から「先生見てー」と声を掛けている。その頃から、クラスでのKちゃんの姿に変化が見られ、かんしゃくを起こしたり、集団を乱すことも無くなってきた。

お迎えに来た母親にも「お母さん見てー見てー」「ここまで行けるようになったよー」とキラキラした笑顔で叫ぶ姿が見られた。母親も、今まで叱ることが多かったKちゃんに「すごいねー！」「頑張ったんだね」「お母さんにできないことができるんやね」と褒める機会が増えていった。

同時期に取り組み始めたYちゃんも母親が仕事を始めたばかりで、情緒が安定せずKちゃんと保育者の取り合いになって、ライバル同士だったが、一輪車を通じて、お互いに歩み寄り、意気投合するようになった。今では、その中にAちゃんも加わり、３人で楽しく

一輪車をしたり、一緒に遊ぶようになっていった。

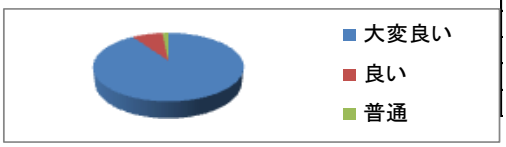
【考察】
K ちゃんにとって一輪車をしている間はいつも忙しい母親を独占でき、また、必ず褒めてもらえる至福の時間である。「私はここにいるよー」「もっと見てー」と自己主張でき、また、それを母親や保育者が喜び、応援してくれる。そのことで周りに認められていると実感でき、心が満たされ、他者にも目を向け、自分以外の存在も受け入れられるようになっていったのではないだろうか。 集団を乱していた K ちゃんが、一輪車に乗れるようになったことで自信を得て、同時に居場所を見つけ安心感が生まれ、我慢したり、素直に思いを表現できるようになったりと、自己制御能力が身についたと考えられる。

保護者アンケート

24年度卒園児のご家庭に対し、一輪車の取り組みに対してのアンケートを実施しました。

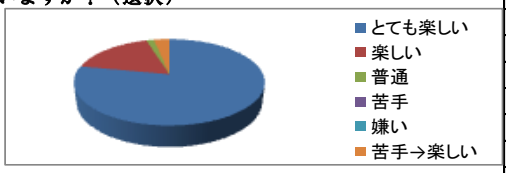
一輪車教育についての評価（選択）

大変良い	58	91%
良い	5	8%
普通	1	2%
悪い	0	0%
非常に悪い	0	0%



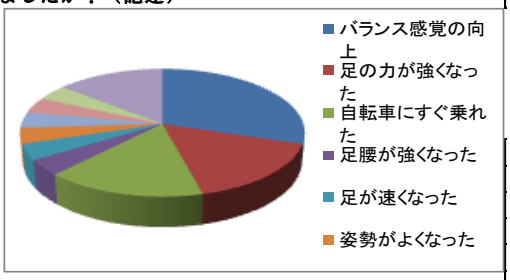
お子さんは一輪車に対してどのような印象を持っていると思いますか？（選択）

とても楽しい	50	78%
楽しい	11	17%
普通	1	2%
苦手	0	0%
嫌い	0	0%
苦手→楽しい	2	3%



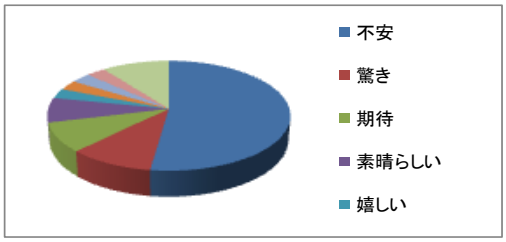
一輪車を始める前と後でお子さんに何か身体的な変化はありましたか？（記述）

バランス感覚の向上	15
足の力が強くなった	8
自転車にすぐ乗れた	8
足腰が強くなった	2
足が速くなった	2
姿勢がよくなった	2
ケガに強くなった	2
体力がついた	2
背筋が強くなった	2
その他	7



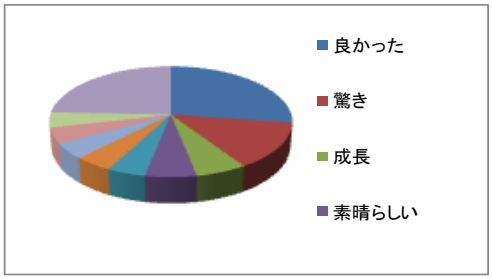
一輪車教育に対しての第一印象は？（入園時）

不安	36
驚き	7
期待	6
素晴らしい	5
嬉しい	2
ケガへの心配	2
感動	2
どんな指導法なのか	2
その他	7



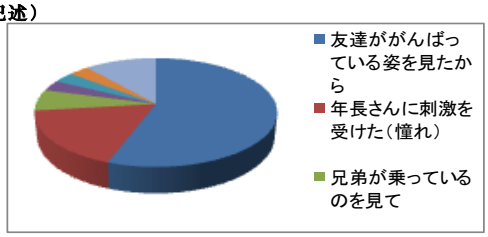
一輪車教育に対して印象はどうですか？（卒園時）

良かった	18
驚き	9
成長	4
素晴らしい	4
良いイベント	3
こばとならではの経験	3
可能性を教えられた	3
感動	3
自信がついた	3
その他	16



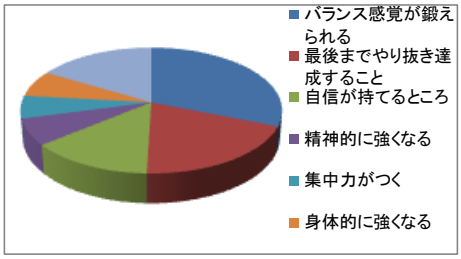
お子さんが一輪車を始めたきっかけは何だと思いますか？(記述)

友達ががんばっている姿を見たから	35
年長さんに刺激を受けた（憧れ）	11
兄弟が乗っているのを見て	4
興味をもったから	2
一輪車コンテストの胴上げを見て	2
先生の優しい声掛け	2
その他	7



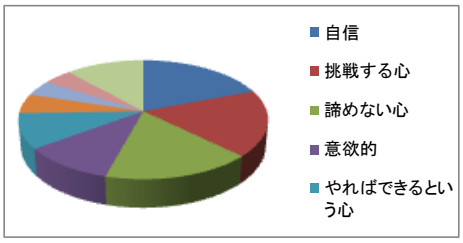
保護者の方から見て一輪車のいいところは何処だと思いますか？（記述）

バランス感覚が鍛えられる	32
最後までやり抜き達成すること	20
自信が持てるところ	14
精神的に強くなる	7
集中力がつく	6
身体的に強くなる	7
その他	17



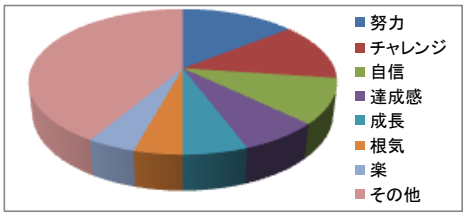
一輪車を始める前と後でお子さんに何か精神的な変化はありましたか？（記述）

自信	18
挑戦する心	17
諦めない心	16
意欲的	10
やればできるという心	9
精神的に強くなった	5
達成する喜び	4
集中力がついた	4
その他	11



門司こばと幼稚園の一輪車教育を一単語で表現すると？（記述）

努力	10
チャレンジ	9
自信	7
達成感	5
成長	4
根気	3
楽	3
その他	29



☆その他の意見

感動　自立　勇気　やる気　名物　競争意識　持続力　栄光　驚愕　鍛錬　仲間意識　自信の元　バランス　心技体　愛情
総合力　心身の魔法　できる　笑顔　成功体験教育　自己実現　生きる力

アンケートについての考察

・子どもは、幼稚園と家庭では違う一面や、発言をする。その中に発達のキーワードが隠れている。

・保育者は大勢の子どもを対象に保育を行っているが、保護者にとっての対象は我が子のみである、家庭での姿は発達がよく見える。

・回答の中に「子どもを尊敬する」というものがあった、子どもは尊敬されることで、自尊心が芽生えてくるのではないだろうか。

・一輪車に取り組んだ後に、自転車の練習をする家庭も多く、半日で乗れた例など、概ね短期間で成功しているようである。
バランス感覚の向上や自信が寄与していると思われる。

・子どもが一輪車に取り組んで、背筋や足腰が強化されたことでバランス感覚が向上し、体力が更についてきた事がみてとれ、
その事により、その後の身体の発達も促しているようである。

・一輪車を始めた動機の過半数が〈友達ががんばっている姿を見たから〉であり、その他も他者との関わりの中で生まれている。
一見すると一輪車は一人で取り組んでいるように感じるが、常に何らかの形で他者と関わっている。

・一輪車の取り組みを単語で表してもらう時に様々な言葉が出てきたことは、多くの発達や成長があるといえるだろう。

・少数意見ではあったが、「乗れない子にはつらい」というものがあった。すべての子どもと保護者が満足する事は難しいとは思うが、
そのような子どもに対すケアも重要であり、今後の大きな課題である。

・保護者の一輪車に対する第一印象は〈不安〉である。しかし、卒園時の印象は良いものに変わっていく、つまりは多くの場合、
無用な不安である。この不安を入園前にしっかりと説明して、理解してもらう必要がある。

研究のまとめと今後の課題

まとめ

一輪車に乗れるようになった子ども達の成長の形はこれまで漠然と見えていたが、明確なものではなかった様に思われる。今回の研究を進めていく中で取り組んだアンケートから家庭の子ども達の様子（幼稚園では見えにくい姿や発言）や保護者のおもいを具体的に知ることができた。また、様々な角度から見た子ども達の心身の成長に感動させられたり、保護者と喜びを共感できるようになった。

今回、【幼児の健康な心と体を育む】という研究として、一輪車への取り組みを見ていく中で子ども達が主役となり、はじめたきっかけや心情の変化など一人ひとり異なった過程を経て目標に向かって進んでいく様はその子のそれぞれのドラマであり、１つ１つの展開をそばで見守っている私たちの胸を熱くさせる。主体的に活動し、試行錯誤しながら、子ども達が自ら考え、実践することが意欲につながっていくように感じられた。そして、自らの力で難題に挑戦し、道を切り開くことで達成感が生まれ、自信や自尊感情を育むことが分かった。**はだし**で一輪車に乗れるようになることで、足腰の強度やバランス感覚が育まれ、遊びの中で自然と体を動かす時間も増している様に感じている。その日々の積み重ねがその子達なりの運動能力の向上につながっていくと思われる。どの子どもにも無限の可能性があり、子ども達の懸命でまっすぐな姿から、我々、保育者も多くの事を学ぶことができた。しかし、一人で取り組むのは困難であり、日々の進歩や努力を褒め認める保育者がいて、切磋琢磨できる友だちの存在が発達に不可欠だと感じた。保育者が自分を温かく見守ってくれると感じた時、更なる意欲が生まれやる気に繋がっていく。

発達とは教わって獲得していくものではなく、子ども達の能動的な行動で獲得していくものだと考え、保育者は子ども達自らが心を動かす事のできる環境を用意し、子どもの発達に応じた適切な援助をしつつ、褒め、見守る保育が大切であることを再確認した。子ども達は自ら育つ力をもっている、その力を信じて待ち、見守る姿勢も保育者には重要なことではないだろうか。

今後の課題

・一輪車の取り組みを保護者に向けて発信し、保護者の不安や心配な思いを受け止め、園と家庭の塀をなくし、共通理解を深め、安心して子どもの取り組みを見守る事が出来るように配慮を行う事が必要。

・運動面において苦手意識があり、一輪車にも興味を示さない子ども一人ひとりに対し、個々の対応を深め、新たな援助の方法を模索していく。